

## 正法眼藏真偽論

永 久 岳 水

正法眼藏は永平道元古仏の御真撰であると信奉されているが、これは宗門七百年の歴史を通じて一貫せる信仰であったかどうか、また正法眼藏真撰説は、信仰の立場からだけでなく、理論的にも成立するものであるかどうかと言うことを、種々の方面から探求して見ようと言うのが、正法眼藏真偽論の目標とするところである。正法眼藏が永平古仏の御真撰であるかどうかと言う問題を提挙すると、現代では時勢おくれの題目であり、既定の事実を論量する無駄骨折りの戯論であると嗤笑するものもあるであろう。永平正法眼藏が出版されてより以来、正法眼藏真偽の問題に対し、一言も新しく論議を挿んだものがないのであるから、一般が正法眼藏真撰説を信奉して居るのは当然のことであり、また誠に讃仰すべき美事である。正法眼藏全体に対して、何らの疑問を抱かず、総て永平古仏の御真撰であると信奉して居られる人々から見ると、正法眼藏真偽論は不要の問題を提へたものであるとも見えようし、平地に波瀾を起すものであるとも見えるであろう

が、永平古仏真撰説を、只だ信仰の立場からのみ仰信するの  
で無く、理論的研究の方面からも肯定することが出来れば、  
それもまた永平古仏に対する報恩謝徳の大業となりはせぬで  
あろうか。正法眼藏親撰説が、信仰の方面からのみでなく、  
情理をつくした理論の方面からも論じ尽くされ、其の成果と  
して、偉大強固なる信仰となつて居るものであるなれば、殊  
更ら茲に既定の結論を重ねて論う必要はないのであるが、吾  
人の見聞した範囲から言うと、正法眼藏真偽論は議論として  
は中絶の形であつて、未だ結論に達せず、理論的方面に於て  
は、最後の実を結ばないで、今日に引き継がれていると解す  
るものである。正法眼藏真偽論と言う標題に接すると、其の  
題目が刺戟的であるので、宗学上の新問題と解するものもあ  
るであろうが、余が新しく始めて提起した問題ではない。釈  
尊の經典に対し、真実の説法輪であるとか偽経であるとか言  
う問題が、往時より仏教界に存在していたと同じく、正法眼  
藏真偽の論議も既に早くより存在していたものであつて、古

往に於ける宗門碩徳の提案に対し、吾人としての解決を与へんとするに過ぎないのである。言はば古い古い黴の生えた問題である。宗門教学の歴史に指を染めたものは、誰しも熟知されているであろうが、永平正法眼藏の出版以前に於ては、正法眼藏学者の間に於て、程度の差こそあれ、いくばくかつ、この問題が問題視されていたのである。徳川時代に於ける正法眼藏中心の議論は、正法眼藏の編輯史が其の主題であったかの如き観あることは免れないが、其処に絲を引いて、正法眼藏真偽の問題にも聯関するところが、かなり多く多いのである。見方に依れば、正法眼藏編輯関係の異論も、其の根底に於て、正法眼藏真偽観に対する意見が一致しないので、議論に花が咲くに至ったところが多いとも觀察することが出来るのである。

正法眼藏真偽論と言うと、正法眼藏全体が、総て永平古仏の撰述であるか、或は其の総てが永平古仏の名を冠した疑書であるかと言う、総てか絶無かと言う、切迫した問題の如く思うものがあるかも知れないが、決して、そんなに急進的な弾力性のないユトリのない取り扱いをしようとするものではない。正法眼藏真偽論と言うても、その意味を広く解して広義に取り扱わんとするものである。徳川時代に於ける真偽論を取りあげて見ても、決して狭い意味のものでなく、オールカナッシングかと言うような弾力性に乏しい神経過敏症に陥

った議論は少ない。正法眼藏は総て永平古仏の御真撰なりや、正法眼藏と言われるものの中にも、永平古仏の御親撰でないものが混入して居りはしないか、若し御親撰でないものが混入して居るとすれば、何れの巻が親撰本であり、何れの巻が偽本であるのだろうか。正法眼藏特定の一巻の中にも、永平古仏の御真撰であるところと、後人が添加したところがありはしないであろうか。正法眼藏は永平古仏の御親撰であると言われているが、永平二世懷辨和尚の力が添加されていると言うこともあるのではなからうかと言うように、ひとしく真偽論と言っても、範圍に広狭の差があり、其の論議の性質にも、いろいろの相違があるのである。正法眼藏価値観の異同、すなわち或る巻を重要視し、或る巻を軽視すると言ったことや、正法眼藏編輯の仕方の異同と言ったことの上にも、多少は正法眼藏真偽に関する微妙な心理が動いて居りはせぬかと臆測するものであって、或は時に、こう言う方面までも、この正法眼藏真偽論の名目の下に触れて行くことを大らかな眼で認めてもらいたいと思うものである。

### 卍山和尚と正法眼藏真偽論

正法眼藏の参究に手を染め、宗門に正法眼藏なる無上の法宝あることを、宗門の内外に宣揚したのは、卍山道白和尚で

ある。正法眼蔵に関する著述は残されていないが、円山和尚の脳裏には、正法眼蔵に関する豊富な知識教養が貯蔵されていたに違いない。鷹峰円山和尚広録を繙くに「上永平円明禪師書」なる一篇が収めてある。これは円山和尚が宗統紊乱の弊を一掃するために、正法眼蔵の法文を証拠として、自己の赤心を、大本山永平寺の円明禪師に訴え、宗統復古の大業の成否こそ、永平古仏の法運の興廢を決するものであると言うことを陳辨せし尺牘である。今、其中で必要と思うところを和文に訳して示すこととする。

謹んで、高祖の正法眼蔵面授の巻を按ずるに、所謂一仏一祖、一師一弟子といへども、相面授せざるものは、仏仏祖祖にあらず。乃至、一世といへども、師を見ざるものは、弟子にあらず。弟子を見ざるものは、師にあらず。定て是れ相見相見て、面授し来り、嗣法し来るは、祖宗面授の道現成なり。又云く、過去、現在、未來、甚麼の仏祖か、師資相見せずして、嗣法するや。

又嗣書の巻の中、大宋国の弊習を説いて云く、知識の会下に参じて、懇ろに頂相・法語を請し、嗣法の標準に備ふ。然れども、一類の狗子有り、晩年に及びて、官家に陪銭して、一院を討得し、住持職に補する時、法語頂相の師に嗣がずして、当代名譽の輩、或は王臣の親附の長老等に嗣法するときば、得法を問はず、名譽を貪るのみ、悲しむべし。末法惡時、是くの如きの邪風有ることを。此の輩、未だ曾て一人の夢にだも、仏祖の道を見聞すること有らず。

又た住山の巻に、所謂る、今大宋国、住持と称する輩、間に院に因りて、嗣を易ゆる者有り、憐れむべし、仏祖の法、正伝せざることを、是れ畜生なり、知識に非ず、豈に僧位に廁んや。

宗弊革新の大業、いわゆる宗統復古の大業を述べた著述としては、どうしても円山和尚の嗣法の弟子である白竜和尚が著わした宗統復古志と、円山和尚の法弟である徳翁良和尚が著わした護法明鑑の二著を挙げねばならないが、漢文和文の異同はあるにせよ、上掲の法文と大体同様の記事が、此の二つの書に掲載されている。是れによると、円山和尚の宗統復古の大業は、正法眼蔵面授と嗣書と住山との三巻の法文に基いて、自己の見解を固め、永平古仏の古法を挽回せんがために実行活動されたものであると言うことが知られるのである。然るに此処に証文として引用されている住山の巻なる宗典は、一向に其の正体が解らないのである。正法眼蔵九十五巻本の中に、其の名が見られないばかりでなく、自分の知れる限りに於ては、いかなる異本の正法眼蔵の中にも発見せられない。それだけではない。円山和尚は、八十四巻本正法眼蔵を新たに編輯して、後世を利益して居られるが、其の八十四巻正法眼蔵の中にも無く、円山和尚が拝閲されたと言われる八十三巻正法眼蔵にも見つからない。円山和尚が宗統復古の大事業を行う証権として採用した此の一卷が、何処の如何なる正法眼蔵にも発見されないと言うことは、如何にも奇怪

なことであるが、事實は如何んとすることが出来ない。面授の巻の法文を引用する場合には、正法眼藏面授とあり、住山の巻の法文を引用するにあたりては、ただ住山の巻と言っているだけであるから、正法眼藏の住山の巻ではないのではあるまいかとも考えられるが、併し嗣書の巻の法文を引用する場合にも、正法眼藏嗣書と書かれていないところから見ると、正法眼藏と言う冠称がないからとて、正法眼藏の嗣書、住山の両巻を指すものと解するのが不当とも思へない。面授や嗣書を正法眼藏からとり、住山の巻だけが別であると言うことは、この文勢では解しがたい。徳翁和尚の護法明鑑を見ると、謹んで按ずるに、高祖正法眼藏の中、面授の巻には云々、又た嗣書の巻には云々。又た住山の巻には云々と記してある。正法眼藏の中なる文句を明かに、文の上部面に記して、三段に書き分けてあるのである。これによると、どうしても住山の巻も正法眼藏であり、正法眼藏の中に、住山の巻があらねばならぬこととなるのである。白竜和尚の宗統復古志坤の巻を見ると

官難に云、元祖家訓とはいかん、答て云、元祖正法眼藏面授の巻に、いわゆる一仏一祖……弟子にあらず。又住山の巻に、今は大宋国住持と称する輩云々。是れ乃一師印証、師資面授、仏祖の正規、永平の家訓なり。

と面授の巻と住山の巻とが掲げられている。これによると、

永平古仏の御親述の中に、この住山の巻が無ければならぬこととなるのであるが、高祖に関する古来の著述名を探しても、この住山の巻なる名称は見つからない。徳川時代の正法眼藏の学者にも、この住山の巻に言及したものが無く、ただ一師印証、宗統復古運動の關係文書の中に、忽然として此の巻名が記されているばかりである。復古卍山老人に対しては、是れを讃するものの多いことは言うまでもないが、これを謗するものも亦たないわけではない。今仮りに卍山和尚を疑って見るなれば、この住山の巻なるものは、たとへ存したにせよ、真実の永平古仏の著述でなく、一種の偽書ではあるまいかと言うことも考え及ぶのである。卍山和尚のことであるから、無い書物を仮作して、住山の巻に云くなどと、自己の思想行動の本拠あることを強辨されるわけもあるまいから、こう言う名前前の書物が存したことは間違いないであろうが、一種の疑念の湧起するを禁じ得ない。若し住山の巻が正しい正法眼藏であるなれば、正法眼藏校定編集の時にあたり、卍山和尚が自家編輯の正法眼藏の中に編入されなかったことが不可思議である。

卍山和尚が編集された正法眼藏は八十四巻本である。卍山和尚系統の正法眼藏には、八十四巻の外に、或は二巻、或は五巻の正法眼藏が附録として附加されているものを見受けるが、卍山和尚が正法眼藏として校定編集されたものは、八十

四卷正法眼藏である。現代宗門流布の九十五卷本に較べて卷数が十一卷も少い。和尚は正法眼藏の他の十一卷は見られなかったのか、或は見られても偽本として斥けられたのか、或は真偽混淆書として軽く見られたのか、或は正法眼藏と言う総号のもとに、撰入すべきものでないと思われたのか、其の辺は詳しく探る手がかりに乏しい。辨道話発見の歴史から言ふと、**円山和尚**も亦た辨道話を見られた筈であるから、現代正法眼藏として取り扱われているものの中にも、**円山和尚**は正法眼藏として取扱はれなかったものが存するものと見ねばならぬ。

寛文甲辰秋八月、武州の万頂山で記した永平法眼藏序の中に、  
本朝の永平古仏、和漢の文字を雜糅して、此の書一百卷を撰述して、先仏曩祖の奥蘊を顯開し、拈華得髓の正脉を流通するもの、皆な前賢の及ばざる所にして、面授の篇、仏道の卷、実に古今の眼藏、独達の玄論なり。云々。

と言つて居る。正法眼藏各卷の中、面授の卷と仏道の卷とを以て、特に古今の眼藏、独達の玄論と高唱されているところに、**円山和尚**の思想、及び時代の特質も見られ、そこにまた正法眼藏価値差別の見解が、いささかながら觀取される。**円山和尚**が面授と仏道との兩卷を、殊更に重視された事実を論究し探究して行くと、当時の曹洞宗の法弊や、宗教界に於け

る位置、それを切り抜け、取りさばいて行く白道と言うものが見つけられるであろうと言うものである。**円山和尚**は面授の卷を尊崇し、これを普及するために、元禄庚辰仲夏の日、**剗剗氏**に附して、この卷を印行されている。面授の卷の出版については、正法眼藏伝播史に關聯して述べるつもりであるが、この面授の卷の出版は、後來宗門に論議の種を蒔くこととなったものである。

### 独菴一門と正法眼藏真偽論

正法眼藏真偽いかなの問題に關し、最も極端なる見解を把持していたのは、独菴玄光和尚の一門ではあるまいかと思はれる。独菴玄光和尚は、徳川時代に於ける宗門稀有の博學者であつて、長崎の皓台寺に法幡を翻へし、眼藏界一方の權威者である天桂伝尊和尚の先輩に當り、たしかに當時の宗門に於ける一方の宗將であつた。宗弊革新の大業は、**円山和尚**によりて著手大成されたものの如く思われているが、護法明鑑によると、この玄光和尚が實際運動に著手した最初の人物ではなかったかと察せられる。伝法嗣承に關する見解は、玄光和尚と**円山和尚**との間に相違するところがあつたようであるが、寺院に因りて嗣承を変えて行く、宗門現実の伝法相續に對し、反對の見解を抱持していたことに於ては一致していた

ものである。この玄光和尚が正法眼藏に関して、如何なる見解を抱持していたかは明白には解らないが、正法眼藏に關し、疑問を抱いていたのではないかと思われるところがある。天桂和尚の正法眼藏辨註調絃を見るに、

近世洞門に文字の知識あり、浮華大言して、諸方を吞吐すれども、一言を此書に措置すること能はず、実に他の諮問に答へて、知らず知らずと道ふ。這の漢、心肝五臟一欸に供し了れり。固より短綆以て深きを汲むべからず、器小にして以て大を盛るべかちず、其の任ずる所に非ざればなり。云云。

と言う文字が見られる。正法眼藏辨解の中にも、これと略ば同様の記事が載せられている。文字の知識とは、何人を指したのか、表面上は解らないが、これは独菴玄光和尚を指したものの如く言われている。天桂和尚は玄光和尚を招請して、其の教説を聴聞したような関係もあったので、指名することを遠慮されたものであらう。玄光和尚は宗門学人の正法眼藏に關すを質問に答えて、知らず知らずと言うて明答されなかった。これは天桂和尚によると、玄光和尚が世典文字博覧の輩であつて、宗眼に昧く、正法眼藏の玄義を理解するほどの大人物、宗教的人物で無かつたからであると言うのらしいが、吾人は其の裏面に於て、正法眼藏を疑著していたものと推測するのである。天桂和尚の正法眼藏辨註調絃に現れた記事だけでは、さうした推測を行うことは、いささか妥当で

ないかに思われるのであるが、後來、独菴門下から、甚しき正法眼藏否定論者が現れたことを思ふと、玄光和尚の胸臆に微々ながらも、正法眼藏否定の精神が動いていて、其れが門下に影響したものと推せられる。玄光和尚は径山独菴叟護法集の著者であり、其の一世の知見を傾けて、諸方を吞吐した評論家である。好んで内外の典籍を渉獵した行業から見ても、其の生涯に於て、かりにも宗祖の大法藏と言われる正法眼藏を拝覽されなかつた筈はない。しかも此れについて、一言も一個の見も述べないと言うのは、そこに天空快濶ならざる罣礙の一物が存在していたからではあるまいか。

正法眼藏に關し、玄光和尚は不知不知と言って、煙幕を張り、巧みに自家の見解を隠しているが、其の一門からは、極端なる正法眼藏否定論者が出現して居る。玄光和尚の徒に融仙なる和尚があり、叢林藥樹と言う一書を著わしている。融仙和局の行歴は解らないが、叢林藥樹の自序に於て、釈石雲叟某、筑前州内野之松浦谷に書すとあるより見れば、九州方面に法鼓を鳴らしていた人であらう。この叢林藥樹の後序と云うか、書叢林藥樹後なる文を見るに、無関瑞門和尚が前古未曾有の激烈きわまる正法眼藏否定説、正法眼藏偽本説を吐露している。

蓋し聞く、医の一方を執する者は、色身を誤り、經の一義を執する者は、慧命を誤ると。誠なる哉。然りと雖、唯だ真正に經の一

義を執るときんば、又た尚ぶべくして、姦偽之に反して、一家の私言を衒ひ、一己の臆説を唱ふる者、又た甚だ多し。設ひ千仏出世すと雖、其れ此輩を奈何んせんや。是れ之を甚だ憐愍すべきの者となす。夫れ今の世に当て、之を論ぜば、已に佳城を洛の鷹峰に閉る卍山禪師、其の尤なるものなり。何んとなれば、予私かに其の平生の言論著述に就て、以て之を察するに、其の養ふ所、焉ぞ廋さんや。蓋し其の意に以為へらく、唐宋の交ひ、伝燈一千七百の善知識と雖、恐くは、我が永平の元禪師に如かず。況や元明の末運に於てをや。所以に、其の平生の著述、僅に議論に涉るときんば、固我偏僻、曖昧漫漶として、其の理の真偽当否を論ぜず、漫に言ふ、元古仏・元古仏と。動もすれば、永平の正法眼蔵、及び永平広録を引援して、以て明証となし、支那万祖の禪録を一掃して屑とせず。嗚呼、誰か此の土に於て、洞水の流れを汲む者、永平を今日に仰がざるべけんや。殊に知らず、永平広録なるときんば、支那明眼の知識、已に棟び去るの沙石にして、拔録の金壁、盛に世に行はるときんば、何の足らざる所か之れ有らん。独菴嘗て、彼書を評して、以て怪しむべしとする者、亦ならずや。嗚呼、又た何れの世にか偽書無からんや。夫れ彼の五千の黄卷の如き、支那天竺の三蔵法師等、世々に詔を奉じて以て翻訳するすら、猶偽經の為に混乱せられて、多少の高僧、之を選び、之を択んで、而して後に玉石初めて相分るときんば、永平の正法眼蔵亦た怪しからずや。故に独菴一生、片言も彼の書に渉らず。之を問ふ者あれば、則ち曰く、我れ知らず、我れ知らず、未だ彼の書

を見ずと。其れ独菴の如き、異道百家の書と雖、読まざるなきときんば、豈に又た我が家の古書を遺すべけんや。加之、古来室中の秘書と称し、法施を一家に鄙悞して、未だ嘗て災木を許さざる者は何ぞや。蓋し忌む所あり、怪む所有ればなり。近来卍山禪師に至て初めて面授の巻と称する者を、書肆に洛陽に印行して、亢顔大言し、此を以て的証となし、満意に禪宗を談ず。何ぞ思はざるの甚しきや。若し独菴をして今日に在らしむるときんば、彼の師、豈に敢て此の書を梓に鏤はしめて、以て面稟面授の妄談を人間世に施すことを得んや。施さざることや必せり。華燈光を戢むるときんば、飢鼠躍り、曜雲景を匿すときんば、狐狸聚る。必然の勢なり。夫れ独菴の如き、氣勢激烈、護法の心志、老て益壯にして、是非辨別至らざる所なきときんば、豈に彼の書を措んや、措かざることや必せり。彼の書、若し旧に依て、室中に秘在せば、又孰れ有てが、強て毛を吹き、垢を滌ふて、以て家醜を門外に挙んや。予も亦嘗て竊に彼書を閲す。信ずる所は唯重雲堂の記のみ。嗚呼又何れの世にか偽書無からんや。尽く書を信ぜば、則ち書なきには如かず。彼の師、何ぞ三思を此に加へざるや。

是れは、享保己亥三月二十九日に書いたものである。この一篇の中には、独菴玄光和尚を尊崇し、卍山道白和尚を誹議する空氣が充満して居り、卍山和尚が、依って以て武器として居る、永平広録・正法眼蔵を否定せんとしているのである。正法眼蔵が何故に偽書であるかと言うことについては、詳しい叙述がないが、重雲堂の記の一篇のみが信ずることが出来

るものであって、其他は一切尊信するに足るものでない。正法眼藏を秘書として室内に伝承し、之れが印梓公刊を許さないのは、正法眼藏そのものが、径しいところがあるからであろうなどと言って、思い切った正法眼藏否定説を高唱しているのである。無関瑞門和尚が見た正法眼藏は、いかなる種類のものであったか記されていないが、重雲堂記が含まれていたことから察すると、六十巻本や八十四巻本よりも巻数が多く、恐らく九十余巻本正法眼藏ではなかったかと思われる。然るに其の中、重雲堂の記だけか尊信するに足るものであると言うような見解が、いかなるところから出て来るのか、吾等に於ては想像もつかないほどの僻見である。正法眼藏研究初期のころには、清規に關聯せる正法眼藏は、正法眼藏なる総号の精神に相応しからぬところがあるとし、清規關係の諸巻を、正法眼藏に含ましめべきものでないとして否定し去り、追放し去ろうとした趣が見える。然るに、この無関和尚は、その清規書と見られる重雲堂式一卷を、高祖永平の真本と判定されたのであって、一般宗学界の傾向とも、全然方向を異にした道を進んで居る。天桂和尚は、此の叢林藥樹の一文を読まれたと見えて、註法宝壇經海水一滴第五卷の中に反駁文を載せられて居る。

又た瞎禿子有り、云く、正法眼藏の中、重雲堂の式のみ古仏の親言、其の余は怪しむべくして怪しむべし。嘗つて人有り、此の書

の真偽を或師に問ふときんば、只だ知らず知らずと謂へりと。或師の知らざることは存じて論ぜず。吁、汝が曹らの如き、跖犬堯を吠ゆるの謂なり。會つて面識に非されば、驚嘩するも亦た宜べなり。彼の毛嬙西施の如き、人の美とする所、猿猴鵙梟、之れを見れば、惴惴恟懼して、高く飛び、決く驟る。固より異見異類なればなり。爾も亦た今日の鵙梟猿猴にして、古仏超方的の面目を怕怖する者か。云云。

無関瑞門和尚は永平古仏の宗旨に親近していないから、古仏の高遠なる宗乘に接近すると、怕怖の心を起し、正法眼藏を否定するに至ったものである。古仏と異なる道を歩んでいくからして、正法眼藏の真色を見破することが出来ず、却つて偽本と言うに至ったと見て居られるのである。天桂和尚の批判は、蓋し無関瑞門和尚の心臓を抉っているであらう。正法眼藏秘本説に対する天桂和尚の見解もまた、この海水一滴に現れている。

又た吾門の禅徳等、正法眼藏を拝瞻すと雖も、宗旨を知らず、徒らに贅説して云く、正法眼藏は伊呂波文字にして、句法躰裁無し、理義も亦た通じ難し、是の故に、古へより宗師之れを秘して、他見を許さず。然るに今ま之れを引いて証と為すときんば、家醜外に揚ぐると云はんかと。謔の甚しいかな。夫れ汝が言ふ所のものは、俗儒詞章の辨口にして、自門本家の道話にあらず。蓋し正法眼藏、世に露布せざるは、之れを賤として藏すに非ず、之れを秘



して貴ぶに非ず。吾が門の人師、禅眼眇昏にして、一も見る所無し。巻して繙かず、匣して之れを蔵し、寥しく蛎魚の爲めに食ましむるのみ、盲者の鏡を得て、以て扈を蓋ふが如し。其の之れを用ふる所を知らざればなり。設ひ他家をして聞見せしむとも、又た汝に同じき者なるときんば、將た耳食すると何んの異なることか之れ有らん。云云。

無関和尚の眼蔵秘本説は、正法眼蔵に忌むべき所、怪しむべきところがあるから、秘本として公刊しないのであらうと云うのである。ここに云う禅徳の秘本説は、正法眼蔵は和文で書かれていて、句法も体裁が無く、理義も通じがたいから、之れを世間に弘布すると、却て物笑いの種になるであらうから、古来秘本として、他宗世間をして見ることを許さないものであると言うのである。両者の秘本説の理由に、相違するところがあるように思へるが、禅徳の意見は無関和尚の見解を稍や具象的に発表したもの、或は無関和尚の意見の方が偽本説に一步を進めて居るとも言へるであらう。これを見ても、徳川時代には、正法眼蔵に対し、空疎な我がままな理解不足の批判が、自由に行われていたことが解される。これに対する天桂和尚の見解は、正法眼蔵秘本説は取るに足らない説である。正法眼蔵の内容が悪いからとか、或は和文で書かれてゐるからとか言うようなことで、秘本となって居るのではない。宗門の諸人師が智眼開けず、正法眼蔵を見るといへども

宗旨に徹せず、或はこれを見ずして山門に秘蔵し、これを用ゐるの道を知らないところから、秘本になったのにすぎないと言つて、正法眼蔵秘本説を一蹴して居られるのである。正法眼蔵辨註調絃の中には、秘本説の妄説であることを、さらに別の方面からも立証して居られる。宗門に於ては、正法眼蔵秘本化の思想は可なり強く動いて居り、それが徳川時代に於ける出版禁止の宗令となつて現れている。正法眼蔵尊重の精神が秘本化運動の根底となつて居るものであるが、其れがまた反面に於て、正法眼蔵を輕視したり否定したりする思想を生ずることとなつたと言ふことは、吾人に大なる教訓をなげかけるものでなくてはならぬ。

#### 天桂和尚と正法眼蔵真偽觀

##### (一)

正法眼蔵真偽問題を中軸とし、宗門内に論議の種子を散布し、正法眼蔵研究の機運を激成したものは、天桂伝尊和尚である。天桂和尚は、正法眼蔵研究に対する一線路を開拓した明眼の宗匠で、宗学に関する蘊蓄も深く広く、宗門内に於ける位置も高く、随從參学する禅人も多かつたので、其の吐露する言説論議は、宗門に至大なる影響を与え、大波小波種々

の波瀾を惹起した。正法眼藏中心の宗論の如きは、天桂和尚が提唱せる宗学を中心として鼎沸競起したのが、宗論の発端であるとも言ふことが出来る。天桂和尚の正法眼藏真偽観は、彼の無関瑞門和尚の其れの如く、無稽古無証拠の結論ばかり抛出するものではない。正法眼藏を繙読参究し、其の研究の成果を提げ、明快な判断を下し、鋭く強く自説を主張し、他の主張を粉碎して一顧だも与えないと言うが如き猛勢であつたために、宗門の教学界は、青天白日怒雷走るが如き衝動を受け、正法眼藏真偽問題に対する見解が爆発するや、宗内に大波瀾を捲き起すこととなつた。

正法眼藏に関する天桂和尚の真偽観は、其の著述である、正法眼藏辨解と正法眼藏辨註調絃との二著に現れている。辨解は正法眼藏研究未完成時代の撰述であり、調絃は和尚最後の眼藏観である。正法眼藏の研究が進展し、辨解が後に整理練磨せられ、調絃が大成されたのである。天桂和尚の正法眼藏真偽観を見るには、先著である辨解を放下し、辨註調絃に基づくべきものであるが、徳川時代に於ける宗門教学界の实情に即して言うと、辨解は調絃に先んじて撰せられたものであるだけに、宗門に稍や広く早く弘まつたが、調絃は著述時期が遅くて流布の範囲も狭く遅かつた。宗乗学者の中には、辨解は知っていても、調絃を知るものは其れほど多くなく、調絃だけに基いては、徳川時代に於ける、天桂和尚中心の

宗学論議を正當に理解し判釈することは不可能である。辨解と調絃とを併せ見ることに依りて、思想の推移も、宗学上の論議も、明了に正確に測知することが出来るのであるから、今は此の二篇を中心とし、其れに正法眼藏辨註をも加味して、天桂和尚の正法眼藏真偽観を窺ふことにしたい。

正法眼藏に関する天桂和尚の註解書を、正法眼藏辨註と言つて居るが、其の辨註は、正法眼藏授記、正法眼藏面授、正法眼藏嗣書の三卷より筆を起し、この三卷の註解に渾身の力を傾注されている。これは当時の宗門教界の中心問題と関連しているのであるが、ここでは言及しないことにする。正法眼藏辨解や辨註調絃を見るに、正法眼藏全体に關聯する議論の存することは言うまでもないことであるが、何れかと言うと、授記・面授・嗣書の三卷に対する議論が主となつて居る観があり、正法眼藏真偽観も、此の三卷を圍繞する議論説述の上に映発しているところが多いのである。これを裏面より言うと、授面嗣三卷の正法眼藏に関する天桂和尚の見解言論を探究すれば、そこに和尚の正法眼藏真偽観の大体を觀取することが出来るのである。正法眼藏授記・面授・嗣書の三卷に対する天桂和尚の結論とも言うべきものを率直に述べる、授記の一卷は全分的に永平古仏の御親撰であるが、面授と嗣書との両卷は、全体としては、永平古仏が御撰述された真本とは判定することが出来ないと言うのである。正法眼藏

全体について言うと、正法眼藏六十卷本は、永平古仏が著述された親撰本であるが、宗門に伝来せる其他の諸種の正法眼藏は、真本偽本混雜し、択法眼を光らして、玉石を揀択判別すべきものであると言うのである。無関瑞門和尚は、正法眼藏の殆んど全体を偽本と否定し去ったが、天桂和尚の正法眼藏観は、肯定面が著しく増嵩して、其差は大いに開いて居る。其れにしても、正山和尚は八十四卷の正法眼藏を算定し、板槌晃金和尚は九十五卷の正法眼藏を編輯して居られる事を思えば、其処に著しい懸隔がある。正法眼藏全体、永平古仏の和文法語の殆んど、全部分を、無条件に永平古仏の御親撰であると讃仰している現代宗門の信仰と、天桂和尚の正法眼藏観とを対照すると、時代が隔っているとは言へ、大變な相違である。天桂和尚は、何故に正法眼藏全体に対し、正法眼藏真本説を排除し、正法眼藏真偽混合説を抱持し、正法眼藏に対し、大きい疑問を抱いて居られるかと言うに、其れには諸種の理由が存在するのである。

## (二)

第一は、正法眼藏無編入説である。これは正法眼藏編輯史に關聯する疑著である。宗門に伝承せる正法眼藏に六十卷正法眼藏と言うものがある。六十卷正法眼藏は、永平六世の義雲和尚が編集されたもので、正法眼藏の証本である。然るに

此の六十卷の義雲本正法眼藏を探るに、授記の一卷は編入されているが、面授と嗣書との両卷は編入されていない。六十卷正法眼藏を編集した永平義雲和尚は、永平古仏の法会中に於て修行した永平二世懷辨和尚の法嗣である宝慶寂円和尚の嫡嗣であつて、永平寺第五代の住持である。面授と嗣書との両卷が、永平古仏の手裡より生れ出た親撰本であるとすれば、義雲和尚が正法眼藏を編輯されるに当りて、此の二卷を除外して編入されぬ筈がない。六十卷本正法眼藏の中に、此の二卷が編入されず、義雲和尚の偈頌転語も附せられていないのは、当時この二卷が無かつたからではあるまいかと言うのである。正法眼藏辨解を見るに、

師嘉曆年中、寿七十七、元古仏正法眼藏、凡そ六十篇を編輯し、偈頌転語を述ぶ。其の刊本挙げて、今ま世に行わる。盖し其の六十篇の中、但だ授記篇のみ有り、面授・嗣書の両篇無し。粵に又た城州物集女村永正寺、豊後の泉福寺、芸州の洞雲寺の三本は、二三百已前の謄写にして、義雲禪師所集の六十篇と題目次第符合して差ふところ無し。且つ之に依りて、之を疑ふ、若し古仏在世の時、両篇俱に之れ有らば、義雲禪師、什麼んとしてか、偈頌転語を著けずして、之を除却するや。

偈頌転語とあるは、義無和尚の永平正法眼藏品目頌である。義雲和尚語録に収められて居り、天桂和尚の正法眼藏辨註にも収載されて居る。永正寺本、洞雲寺本は、六十卷正法眼藏

である。泉福寺本は、七十五卷本正法眼藏であるが、天桂和尚拝閲のものは、六十卷本であって、完本では無かったのであろう。

正法眼藏授記・面授・嗣書、三卷の説相を検するに、何れも宗門室内伝法附嘱底の大事を説述せる、宗門堂奥の示誨であって、永平門下の室中に常在すべき彝典である。永平古仏の他の著述の、機に臨み、人に対し、応病与薬的に開示されたものとは類を異にし、性質が違って居る。斯かる尊貴なる宗典が、永平古仏御在世を去る遠からざる時代に、宗門外に逸し去り、義雲和尚に伝承されない訳がない。然かも事実の示す如く、義雲和尚編輯するところの、六十卷正法眼藏に漏れている。これ面嗣兩篇に対する疑念の深まるところである。正法眼藏辨註調絃に

此れ箇の三篇は、永平伝法附嘱底の事にして、善知識相繼転次の最第一義、正に是れ室内常在の彝典なり。然るに当時編集の日、唯だ授記篇のみありて、面嗣の兩篇無し。其の所以如何といふことを知らず。若し果して此れ有らば、何が故に之れを除置して、之れを諸篇に列次せざるや。

これ文証である。辨註、調絃の両著に於て、六十篇中に編入されていないと言う編輯上の疑著から、正法眼藏のこの特定の巻を疑著するもので言うのである。

天桂和尚は、正法眼藏の編輯は、永平義雲和尚から始まっ

て居る。義雲和尚は正法眼藏編集に当り、伝承せる正法眼藏を一切残らず編集して、六十卷正法眼藏とされたものであり、六十卷本正法眼藏こそ、正法眼藏の証本であると確信して居られる。そこで上述の如き見解を主張されるのであるが、此の天桂和尚の説論主張を推し拡めて言うに、六十卷正法眼藏に摂取されている正法眼藏は、永平古仏が親から手づから撰述された親撰本であり、六十卷本正法眼藏に編入されていないものは、永平古仏の親撰本であるかどうか疑はしい、或ものは真本であるかも知れない、或るものは、偽本であろう、或るものは真偽混淆本であろうと言うことになるのである。正法眼藏真偽判定の根本原則を、先づ第一に義雲本正法眼藏に置いて居られるのである。

### (三)

第二は面嗣兩卷贅法説である。正法眼藏授記、面授、嗣書の三卷を熟読検討するに、授記篇は理致渾然として欠如せるところなく、嗣法の条貫は授記の一篇にて完全に説示されて整っている。仏乘に於ける授記と、祖門に於ける嗣法とは、異名同実のもので、授記の一篇だに現在せば、他の面授嗣書の兩卷は用不著である。永平古仏は授記の巻に於て、室内堂奥の大事を説尽して居られるのであるから、更に面授・嗣書と同じ内容のものを拈弄して、頭上に頭を安ぜられるわけが

ない。面嗣二巻は一種の剩説分で、此点からも永平古仏の親撰であるかどうか、疑問符がつけられると言うのである。正法眼藏辨註調絃に、

抑も祖門の嗣法は、仏乗の授記、異名同実、其の指さすところ一にして、自知作仏の因縁一大事なり。仏祖の世に出現する、皆な此の事の爲めならざる莫し。阿儂混家、当知之要爲り、因循自且すること勿れ。凡そ嗣法の条貫、其の顛末を繹ね思ふに、唯某の一篇中に在るべし。授面嗣三篇、各自に出すは、理当然ならず、是れ疑ふべきの三なり。

辨註調絃には、其の一篇と言いて、授記の名をあぐることを廻避しているが、辨解には、授記の巻だけで欠如せるところはないと言われている。天桂和尚の此の説論を基礎にすると、正法眼藏であるためには、各巻の説相趣旨が別々であらねばならない。同一の趣旨、同一の基調をもち、同じ問題を道標とするものは、其の表現法が違つていても、永平古仏の親撰とは言えぬと言うことに販著するのである。授記・面授・嗣書の三巻は、天桂和尚の言うが如く、其の主調が同じものであるかどうか、これは吾人より見れば、研究を要するところであり、三巻おのおの特色があるかと思うが、天桂和尚が、一卷一卷の内容の同異如何と言う点に、正法眼藏真偽判断の標準の一つに挙げられたことは注目せねばならぬ。

#### (四)

第三は書式躰裁不調説である。正法眼藏授記の巻の説述様式、調卷の躰裁を見るに、最初に正法眼藏の標題をかかけ、次に正法眼藏の法文が説き明かされ、最後に後の標題を書き記し、次に奥書、著述の時所があり、一卷の書式が順序整然と調へられ、一書一卷として完全に調えられている。然るに面授、嗣書の躰裁を見るに、其の調子が稍や乱れて、形式が整然と調和が保たれていない。第一に正法眼藏別号の標題をかかけ、第二に正法眼藏の本文を述べ、其れから第三に後題と識語があり、其の次に又たもや、正法眼藏の本文に当るものが再述されている。斯くの如く、一卷の躰裁が完全に調へられていない、言わば不揃いである。授記の巻の完全なるに較べて、一卷一書としての形式が調えられていない。これまた此の両巻を疑著する一つの理由であると言うのである。

#### 正法眼藏辨註調絃に

面授篇の末、年曆記し畢て、其間を闕て古塔主を破責するの文有り。其の文了りて、又た年曆を記す。嗣書篇にも、亦た合血の妄説畢りて、其間を闕て、又た嗣書の両字を題す。其の次下に、先師古仏天童堂上示誨の文を出す。是くの如く相次不合なるもの、是れ疑うべきの四なり。

面授・嗣書の両巻が、永平古仏一人の独作の宗教的作品で

あるとすれば、鉢裁形式が乱調である筈がない。鉢裁書式規矩が整へられていないのは、後人の妄加か、何か不純のものが伏在する証拠であると解されたようである。正法眼藏の一卷一卷は、一処一時期に完成されたものとは限らない。後に修訂されたり、増添附加されたりされたものであると言う、正法眼藏著述の複雑性について想到せず、単調に考えられたことが想像されるが、天桂和尚の此の論法説相からすると、正法眼藏諸巻の中、其の鉢裁形式の完備していないもの、授記の標準型に合沓しないものは、永平古仏の親撰であるかどうか疑問であると言うこととなるのである。

## (五)

第四説相低調説である。正法眼藏は、向上の玄談、宗乗の妙辨、仏門の最高峰を行く、深奥の正法が説示されている筈のものである。然るに宗門に伝承せる正法眼藏を閲するに、高遠玄妙なる思想が述べられず、低級なる、深義の盛られていない説相を盛った巻があり、譚辭誣説と思われるものが記述されている草紙がある。これらは宗教的大人物である、永平古仏の肚裏より迸り出た説相とは判取することが出来ない。必ずや盲禿子が、後代に妄添して、汚穢した偽作であろうと言われるのである。正法眼藏辨解に

又た面授・嗣書の両篇に在りては、其の疑うべきもの已に一二に

非ず、面嗣両篇、十に八九は三藏小乗の説相のみ。

正法眼藏辨註調絃には、授記篇の如きは、理致渾然として、或は一言半句と雖も、人をして疑怪せしむることあること無し、実に是れ古仏の親口親言なり。面嗣二篇は、杜撰の譚辭また一二に非ずと言っている。面嗣両篇に小乗教の分齊に属する低級なる説相を含んで居り、嗣書篇に書かれてある合血の記録の如きは、正に其の実例であつて、斯かる低調なる記述法文が、永平古仏の脳裏手裏より生れ出たものとは解することが出来ないと言われるのである。

天桂和尚は正法眼藏聖文の内容を検点し、其れの優秀性と低級性とを判別し、三藏小乗の説相に属する説相ある巻は、永平古仏の真撰本として、其の全分を肯定することは出来ないと言つて居られるが、さらに進一步して、正法眼藏真偽如何の判定にあたり、合理主義を樹立して居られる。正法眼藏に僻説や邪説や無根花説を垂示記述されたものでは無く、仏祖の正法眼藏を説示吐露されたもので、其の聖文には一貫せる道理が無くてはならぬものである。然るに宗門所伝の正法眼藏を閲読するに、条理の穿貫しないものがあり、正確な根拠に立脚しない無根花説をのべたものが存在している。これらは聡明清高なる永平古仏の真説としては認容することは出来ない、必ずや、後人の妄加したものであらうと主張して居られる。正法眼藏辨註調絃に、

当に知るべし、無根花説有るときは、老僧是れを妄なりと爲し、以て破斥す。真偽を掩はず、曲直を蔵さず、將た何をか忌み憚らんや。いわゆる苟も理に合はざるときは妄なり邪なり。無妄は実理自然の謂ひなり。其の理然らざるは、然るを以て然りとす。其の通ぜざるは、通ずるを以て之れを通ず。必ずしも老僧を怪しむこと勿れ。

道理に合い、根拠の確實性あるものは、之れを肯定し、其の然らざるものは否定して、永平古仏の真撰としての資格を与えまいと言われるのである。合理尊重、非理排斥、自己の知見を以て、理非是非を判断し、脈絡貫通せず、一貫せる理法無しと睨まれたものは、一排して驀進されるところに、天桂和尚の面目が躍動している。天桂和尚は正法眼蔵真偽判定の標準を、正法眼蔵所述の内容に求め、説相の低調なるもの、説相が極度に低劣化して道理に背反するに至りしものは、永平古仏の御親撰の仲間入りを認許することは出来ないと言われるのである。

## (六)

第五写誤添減説である。正法眼蔵は永平古仏が撰述されたまま、直ちに寿梓して、法孫に饒せしものであるなれば、親撰偽撰と言うが如き紛擾は生起する余地が無い。然るに正法眼蔵伝来の歴史を探るに、展転謄写にありて、師資相承して、

今日に伝えられたために、其間に於て写誤を生じ、烏焉魯魚の誤りを生ずることとなった。伝写本の正法眼蔵を、其のまま全体的に、永平古仏の御真撰そのままと言うことは出来ない。正法眼蔵本文の比較研究の必要である所以も茲に存するのである、正法眼蔵調絃に

応に知るべし、這の書編集の日、寿梓を要せざるを以て、直に如今に到り、展転写誤し、且つ私意をもって増損すること、蓋し世として之れ無きは無し、是の故に、其の差錯すること何んぞ微ならんや。

宗典一冊、祖録一部、これを謄写によりて、正確に間違いなく伝えることの困難なることは、斯道に経験あるものの点頭するところであらう。正法眼蔵の謄写にあたり、無意的に、知らず識らず間違いを生ずることは、詮方なきことであるが、天桂和尚は一步を進めて、有意的の増損添減が行われることを説示して居られる。正法眼蔵の聖文の中に、小知見を以て、或は原法文に新法文を増添し、或は法文の中から、或る部分を削除損減したものがあると言う見解である。天桂和尚が著述された註法宝壇經海水一滴に

蓋し正法眼蔵は、諸仏の活眼睛、列祖の活拳頭、直指見性の玄門要道なり。然るに動やもすれば、駢拇の剩語有る者は、後來杜撰の禪和子、蛇足の愚を底して、古仏の正法眼を瞎却するものなり、嗚乎悲しいかな。是の故に老僧多年に正法眼蔵の中の金鑰膏ひ類

し、玉石胥ひ混する者を甄辨せんと欲して果さず、只だ以て哀に欠焉たるのみ。

古来の宗典を採るに、仏祖の法典を完全化せんとするのあまり、原本を増添して、後人の私意己見を加えるもの無しとしない。永平古仏の真撰として、宗門に伝承せられる正法眼藏にも、後世に添減した形跡が見られ、玉石金鉄を揀別せねばならないと言うのが、天桂和尚の見解である。正法眼藏葛藤の巻に

自余の臨濟徳山大瀉雲門等のおよふべからさるところ、いまだ夢見せさるところなり、いはんや道取あらんや

と言う聖文が記されている。この本文に対して辨註は、自余の臨濟と云より己下四十六字妄添なり、芸州洞雲寺金岡和尚の写本になし、是正本なり。按ずるに臨濟より己下の十字を削て可ならんと言つて居る。金岡和尚謄写の正法眼藏は義雲和尚系統の六十卷正法眼藏に属するものである。正法眼藏自証三昧を拝閲するに、徑山大慧宗杲和尚を商量する一章がある。長文の開示であるから、茲に採録しないが、是れに對し、正法眼藏辨註には、

此より下、三紙四行余の文、徑山大慧の事あり、今不載之。其故は是亦宗我の偏見を長ずる端なり。參學辨道の大患莫<sup>シ</sup>過<sup>ル</sup>之<sup>ニ</sup>。故老僧往往如是の処に到ては、辨註を欠のみにあらず、本文をも書写せず。其旨趣は假令古仏は、無我の心を以て、如是其非を辨し

たまふことありといふとも、人々其本旨を不<sup>レ</sup>知、却て我宗の慢を増長することあればなり。然も今、此大宋紹興の中にと云より、終至<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>非<sup>ニ</sup>庸者得皮<sup>ニ</sup>、妄加衍文なり。古仏の真語とは信じがたし。盲禿子、宗我の局見を以て、古仏の些々の破斥語ありしに根拠して、閑言語を添削せしと見へたり。故老僧塗抹<sup>シ</sup>、而不<sup>レ</sup>采<sup>ル</sup>之<sup>ニ</sup>。設有<sup>ニ</sup>水潦鶴<sup>一</sup>、罪<sup>トモ</sup>我何憚<sup>コトカ</sup>之有<sup>シ</sup>。

とある。これらは天桂和尚が、後人の妄添と判定して非斥せられた実例である。天桂和尚が或は写誤といい、或は妄添といい、或は減損と言われる根拠は何れにあるのか、これが大切な事であるが、斯かる説論の出る根源は、一つには正法眼藏謄写本の比較研究にあり、一つには正法眼藏法文語句の通不通にあり、一つには正法眼藏説相の優劣の判釈に存するようである。正法眼藏の異本を対照すると、長文のものの短文のものの、順序排列の同一のものの、異順のものが、見られる。こうした正法眼藏異本の種々相は、写誤妄添の考えを催進したり、深化したりしたようである。

(七)

第六は宗我僻見説である。正法眼藏は永平古仏が無我清淨の苦心を以て、仏祖単伝の正法を開示垂誨せられたものである。宗派的我見を増長し、讃自毀他、自己の憍慢を増長し、他宗他門を賤劣視し毀損するが如き法文が、永平古仏の正法



眼藏に大文字で説述されているわけではない。然るに宗門に伝来せる正法眼藏を拝覽するに、往々にして宗我の僻見を培養するが如き、清浄心を汚すかに見ゆる法文が列ねられている。是れらは決して永平古仏の手裏より流出せるものとは首肯しがたいたのであって、盲目者流が、後に古仏の名をかりて、妄りに添加したものであるに違いない。宗我見を増長するが如き法文は、永平古仏の本意を伝えるもので無く偽作であると云われるのである。正法眼藏辨註凡例の中に

祖翁、此の書を提唱するの時に当り、諸篇の中、後人の且さに宗我の見を抱くべき彈呵の元文に遭ふ毎に、屢しば言く、法門に益無し、恐らくは是れ妄添ならんと、筆削して取らず。祖翁の意、専ら時輩怨疾の僻見を除くに在り。

と述べている。これは正法眼藏法文の中に、自宗他宗を差別し、宗派の同不同を以て、仏法を論じ、宗我見を増長培養する法文があった場合には、天桂和尚が自ら一筆に抹消して、排除されたことを語っているのである。正法眼藏辨註について検するに、天桂和尚は、宗我見を惹起する因縁になるような法文があると、これを抹消し去られたところが少くない。

正法眼藏無情説法の末文に

しるべし、無情説法は、仏祖の総章これなり、臨済徳山のともがらしるべからず、ひとり仏祖なるのみ参究す

とある中、「臨済徳山のともがらしるべからず」と言う語

句は抹殺されて影も形も見せていない。正法眼藏葛藤の巻に於ける臨済徳山大滙雲門に関する法文、正法眼藏自証三昧に於ける大慧宗杲に関する法文を妄添として排除されたことは既に述べた通りである。正法眼藏即心是仏の巻に

近代、大宋国に諸山の主人とあるやから、国師（大証国師）のごとくなるはあるべからず。むかしより、国師にひとしかるべき知識、いまだかつて出世せず。しかあるに、世人あやまりておもしろく、臨済徳山も国師にひとしかるべしと。かくのごとくのやからのみおほし。あはれむべし、明眼の師なきことを。いはゆる。

とある。この法文に対し、天桂和尚は削去の利剣を揮っている。正法眼藏辨註に

此下の近代、大宋国と云より已下、いはゆると云に至るまでの文、泉福寺無著本、洞雲寺、瑠璃光寺等諸本無之、最好。故老僧考本、并辨註共削之。

とある。徳川時代は仏教一般について言うも、宗門僻見の我慢幢が可なり頭を擡げた時代である。禪門のみについて見ても、黄檗隠元一門の渡来によって、大なる刺戟を受け、曹洞とか臨済とか黄檗とか言う、宗派的僻見が芽を伸ばした傾向が見られる。天桂和尚は、これらを嫌忌すべき非仏教的の風潮と見られ、正法眼藏の如き聖典の中には、かくの如き小人輩の見解の法文があるべき筈がないと言うので、宗我見を増長すべき法文は、仏法修行に害あるも益なしとして抹殺さ

れたのではあるまいか。更に吾人の推測するところによれば、天桂和尚が信拠する六十卷正法眼藏の法文の影響である。

長の一面観から、法文を塗抹し去ることは行きすぎの観あるを免れない。

## (八)

六十卷正法眼藏を拝閲するに、臨済和尚や徳山和尚を排斥し攻撃された法文は多く存在せず、見ることが出来ない。他の一聯の異本正法眼藏には、嚴乎として存在する法文が六十卷本正法眼藏には影を潜め欠如しているのである。たとへば即心是仏の卷、葛藤の卷の法文の如きがそれである。天桂和尚が正法眼藏の証本として信奉尊仰しておられる六十卷正法眼藏の中に、他派他門の高僧を非議した法文語句が姿を消していると言う事が、天桂和尚の宗我見増長の嫌いある法文は、永平古仏の真撰にあらずと言う信念を堅むる強い資材となり、断乎として、宗我の僻見を助長する法文を塗抹するに至らしめたものではあるまいか。宗我見増長の汚点あるにせよ、正法眼藏の法文の中から、削除塗抹すると言うことは、正法眼藏の異本を自ら製造するものとも見られるのであって、正確明白な理由のないかぎり、自己の見解を過重するの譏りは免れないであろう。道元古仏が何故に臨済徳山等の大徳を非議されたか、宗我見より非議されたのか、深い意旨があつてのことか、全部的に非議されたのか、或一点について非議されたのか、これは大いに研究を要することである。道元古仏は別処に於て、臨済和尚を高揚せられているところもあるのであるから、深く理由を究めることなしに、宗我見増

第七正法眼藏編次不定説である。宗門に伝来せる諸種の正法眼藏を比較調査するに、其の所撰の卷数に於ても、其の編輯の順次に於ても、種々異態である。七十五卷正法眼藏と、六十卷正法眼藏との二種の正法眼藏だけを対照して見ても、其の卷数に増減があるばかりでなく、其の編次に甚しい異同がある。宗門諸寺に伝来せる総ての正法眼藏が、一切残らず永平古仏の御親撰であるとすれば、其の卷数、其の編輯列次に甚しき異同の存する筈がない。如今宗門諸方に伝来せる正法眼藏の卷数や、編輯列次が一樣でなく、混乱状戦を呈しているのは、其の裏面に、疑著すべき事実が潜在するからであると言うのである。正法眼藏辨註調絃に

如今、諸方の謄本、或は七八十篇、或は百篇に至る有り、篇数定まらず、前後不次なり。夫れ何れの人の手に成れるか稽ふるに繇り無し。是れ疑ふ可きの二なり。

永平古仏と言う正法眼藏の親撰者、正法眼藏と言う総号を兼ね備えながら、其の全体の卷数も列次も違つていと言うことは、真本偽本が混在しているからであらうと言うのが天桂和尚の見解である。正法眼藏の異本を見るに、或は七十五

卷本あり、或は八十四卷本あり、或は八十五卷本あり、或は七十九卷本あり、或は八十九卷本あり、或は九十五卷本ありと言う如く、巻数に多し寡しの異同がある。其の編輯順序を見るも、六十卷本と七十五卷本と異なり、七十九卷本と八十四卷本と異なり、九十五卷本の中にも亦た排列法の異同がある。これら異種の正法眼蔵に接して、天桂和尚が斯かる異同の裏面には、怪しむべき事実が伏在しているに違いないと、疑心を抱かれるのは無理がないが、この編集の不揃い雑様状態が、正法眼蔵真偽疑著の一つの根拠となつてゐるのである。

(九)

正法眼蔵の真偽問題を論究するに当り、天桂和尚は、正法眼蔵六十卷本に収撰されてゐるかどうか、正法眼蔵中に重説複説さるゝことがあるかどうか、著述形式が調整されてゐるかどうか、説述内容が優秀であるかどうか、謄写中に写誤したり添減したりしたところが有るか無いか、編次が六十卷本と一如してゐるかどうかと言うが如き照魔鏡を設け、正法眼蔵の真本偽本を判定裁断せられたようである。併して正法眼蔵の中、宗我見を増長するが如き懸念あるものは、たとえ永平古仏の著述であると思われる法文でも、これに注解を加えず、正法眼蔵の本文の中から削除し、排するが如き猛勢を示して居られる。正法眼蔵編輯史の立場より、或は正法眼蔵著

述史の立場より、或は正法眼蔵伝写史の立場より、或は正法眼蔵研究史の立場より、種々の観点から検討を試み、正法眼蔵の真贋を辨別せんと努力せられたのであつて、其の精進力は、仰いで範とせねばならないのであるが、然れば何れの巻を真作と定め、何れの巻を偽作と考えられたものであらう。これについて天桂和尚は正法眼蔵辨註調絃に

雲禪師排纂の後、此に彼こに散在せる法言、已に若干箇、誰か之を据撫す。或は真なる者、偽なる者、是れ六十篇の遺篇なり。彼此考合するときは、古仏の親語なる者、凡そ七十八篇のみか

永平義雲和尚の編集せる六十卷正法眼蔵は真本である。其他の正法眼蔵の中、十八篇を揀別し、都廬七十八篇は永平古仏の真語であると言われている。天桂和尚の嫡嗣である直指玄端和尚は、正法眼蔵辨註の初頭に膠柱を書いてゐる。其の膠柱に『現成公案篇を始となし、六十篇を以て本集と為す、仍て重て抜粹、并師蒐輯の時の拾遺分、雲師秘蔵の遺篇を得、亦た拾遺分と為す、』と言ひ、天桂和尚言うところの七十八篇に符合してゐる。今、正法眼蔵辨註目録の中から、這個の七十八篇を摘出して参考に供することとする。

第一現成公案。第二摩訶般若。第三仏性。第四身心學道。第五即心是仏。第六行仏威儀。第七一顆明珠。第八三時業。第九古仏心。第十密語。第十一坐禪箴。第十二坐禪儀。第十三法華轉。第十四海印三昧。第十五空華。第十六光明。第十七行持。第十八觀音。

第十九古鏡。第二十有時。第二十一授記。第二十二面授。第二十三嗣書。第二十四都機。第二十五全機。第二十六画餅。第二十七谿声山色。第二十八仏向上事。第二十九夢中説夢。第三十四攝法。第三十一恁麼。第三十二看經。第三十三諸惡莫作。第三十四三界唯心。第三十五道得。第三十六発菩提心。第三十七神通。第三十八羅漢。第三十九徧參。第四十葛藤。第四十一四馬。第四十二栢樹子。第四十三袈裟功德。第四十四鉢盂。第四十五家常。第四十六眼晴。第四十七十方。第四十八無情説法。第四十九見仏。第五十法性。第五十一陀羅尼。第五十二洗面。第五十三竜吟。第五十四祖師西來意。第五十五発無上心。第五十六優曇華。第五十七如来全身。第五十八虚空。第五十九安居。第六十出家。第六十一供養諸仏。第六十二帰依三宝。

拾遺分

第一大悟。第二他心通。第三説心説性。第四礼拝得髓。第五仏教。第六山水経。第七諸法実相。第八仙陀婆。第九仏経。第十仏道。第十一自証三昧。第十二春秋。第十三転法輪。第十四王三昧。第十五大修行。第十六三十七品。

本集六十二卷、拾遺分十六卷、合計七十八巻で、天桂和尚の言うところと合致し、この七十八巻が永平古仏の真撰であると言うことになり、これに漏れたものは疑著すべきものとなるのである。この目録を仔細に点検するに、腑に落ちないところがある。正法眼藏六十巻本を本集とするかの如き口調をもらしていながら、本集の目録と義雲本六十巻の目録とを

比較するに、其間符合しないものがある。義雲本正法眼藏第十は大悟であるが、これには第十は密語を挿入し、義雲本第十の大悟は拾遺分の第一に移されている。義雲本には坐禅箴の巻はないが、これには第十一番目に編入されている。義雲本には、第五十八は出家功德であるが、これには出家の巻が入れている。更に奇異に思われるのは、面授の巻と嗣書の巻との二篇である。面授・嗣書の両巻は、最も鋭く批判し、其の大部分は説相低級にして、永平古仏の御親撰とは思えないと非議しておりながら、本集の第二十二、第二十三に編入されている。この両巻は真偽混合すると言う見地から、また六十巻正法眼藏を証本とする立場からも、本集より格下げをして編集するのが適當であろうかに思われる。正法眼藏六十巻本と符合せぬこと、其他に追及すべきことがあるが、今は暫く見合せることにする。

(H)

正法眼藏九十巻の中、永平古仏の真本として取扱つてよいものの七十八巻で、其他は真本として算えぬと言うのである。九十巻の中、いかなる諸巻が天桂和尚によりて、真本外に揀別し放棄されたかを知るために、茲に其の名目を列記することにする。

第一仏祖。第二伝衣。第三受戒。第四辨道話。第五重雲堂式。第

六洗淨。第七心不可得。第八心不可得。第九梅華。第十出家功德。第十一示庫院。第十二深信因果。第十三四禪比丘。第十四唯仏与仏。第十五生死。第十六道心。第十七八大人覺。

正法眼藏仏祖より八大人覺に至る十七卷である。この当時は、一百八法明門の巻は未だ世に現れていなかったから、天桂和尚の目録中に漏れているが、もしこれが発見されていたとすれば、無論真本外に算入されたであろう。正法眼藏の中、何れの巻を尊崇し、何れの巻を価値少く見たかと言うことは、

其時代の宗門の教学、宗門の実情を反映せるところが多いのであって、宗学發展史上見遁すことの出来ない事柄である。

吾人が茲に怪訝にたえないのは、出家功德の巻を真本外に算定されたことである。六十卷本正法眼藏を検するに、其の第五十八は出家功德である。永平義雲語録に収められている永平正法眼藏品目頌を見るに、第五十八出家功德とし

出入無難俗与真。穿雲明月絶疎親。相逢尽道休官去。林下不ニ會遇ハニ二人。

と言う頌が見える。洞雲寺に伝来せる正法眼藏六十卷本も亦た第五十八出家功德である。天桂和尚は永平義雲語録、洞雲寺眼藏を一覧された形跡があるにも拘らず、出家功德を真本外に排し、出家を真本に算入されている。六十卷本正法眼藏を正法眼藏の証本と主張される天桂和尚としては、言論と實際とが矛盾していると言わなくてはならぬ。大悟の巻と密

語の巻、出家功德と出家の巻とを取りかえられた事については、天桂和尚としては、一理由の存することであるが、義雲本六十卷正法眼藏を証本とする以上、自己の一家の見解を以て、事実を無視し変容するのは穩当の処置とは言えない。しかし、天桂和尚の真面目は、斯かるところに鮮やかに浮び出ているように思える。

#### (四)

正法眼藏の巻数は、天桂和尚の在世時代に、既に九十五巻を数えていた。永平寺に板橋晃全和尚が晋住し、諸種の正法眼藏を蒐集した九十五卷本正法眼藏を編集されていた。然るに天桂和尚は、其中から七十八巻を抜出して、其の大部分を永平古仏の御親撰であるとするのであるが、其の根拠は何れに存するかと問えば、天桂和尚は答えられるであろう。正法眼藏真本七十八巻の中、永平義雲和尚の編集せる六十卷本正法眼藏と共通するものは、義雲和尚の六十卷本正法眼藏編輯の事実、一篇一卷に対し、偈頌転語を施し、宗猷を示された歴史上の事実に基づき、さらに先の照魔鏡に照し、其の真価を認知したからであると答えられるであろう。義雲和尚は、永平古仏を隔つること遠からざる時代に生れ、永平古仏の法孫であり、永平寺を董督した人物であると言う關係に徴しても、義雲和尚の編集せる正法眼藏を永平古仏の直本であると

解釈し判定したのは当然の事であろう。義雲和尚編集の六十卷本正法眼藏には、隠れたる事情があると思うが、茲には問題とせぬであろう。義雲本六十卷は、行持を上下二巻に数えているから、其の実は五十九巻であるが、七十八篇の中から、この義雲本五十九巻を引去りたる十九巻を真本として揀出した理由は如何であろう。玄端和尚の口吻の中には、宗門に伝来せる七十五卷本正法眼藏の中、義雲本六十巻中に無き十九巻を取ったもののようにも見えるが、天桂和尚としては、正法眼藏真偽判定の標準に照し、合格したもの十九巻と言われざるを得ないであろう。吾人は天桂和尚が正法眼藏参究の結果、其の真偽を判別し、九十五巻の正法眼藏の中から、七十八巻を永平古仏の真著とせられたことをここで直ちに否認せんとするものではないが、七十八巻真本説を樹立された裏面には、また別の根拠も存したものでないかと忖度するものである。それは宗門に伝来せる七十九巻の正法眼藏であつて、これからも暗示を受けていられるのではないかと思う。宗門には、六十巻本、七十五巻本、八十四巻本、九十五巻本、十二巻本と言うが如く、諸種の正法眼藏が伝来しているが、別に七十九巻本正法眼藏が伝承されている。これは七十八巻本とも唱えられている。坐禅箴と坐禅儀とを一巻に数えるからである。この七十九巻本と正法眼藏辨注に言うところの七十八巻とを対照すると酷似しているところが頗る多い。第一

は巻数である。天桂和尚が真本と判定せる巻数は七十八巻で、七十九巻本との差は僅かに一巻である。しかもこの七十九巻本は、昔は七十八巻本と唱えて伝承した形跡がある。坐禅箴と坐禅儀とを一巻に数えるか、別々に二巻に数えるかによりて、七十八巻本ともなり、七十九巻本ともなるのである。正法眼藏辨注の目録に於て、坐禅箴と坐禅儀とを合せているが如きも、七十八巻本と似ていると言わねばならぬ。天桂和尚は、七十九巻本の系統の中で、一巻足りないものを所持していられたのではあるまいかと想像を逞しくするものである。

第二には正法眼藏の巻目である。天桂和尚言うところの七十八巻本と七十九巻本とを対照するに、殆んど全体に互りて合致している。七十九巻本に存して、七十八巻本中に無いものは、心不可得の巻一巻である。七十九巻本に於ては、第七巻に仏教、心不可得、山水経が収められているが、天桂和尚の七十八巻真本説の中には、この心不可得一巻が除かれている。

第三には編次である。七十九巻本と天桂和尚言うところの七十八巻本とを対照するに、其の列次が殆んど一致している。辨注七十八巻の中に於て、面授と嗣書との二巻を拾遺分の内に繰下げ、而して第一現成公案より、第六十帰依三宝に至る本集六十巻を以て、七十九巻本の第一から第六十までと対照

するに、其間編次に於て少しも變ったところがない。最後の十九卷は、七十九卷本に於ては、

第一面授、第二嗣書、第三大悟、第四他心通、第五説心説性、第六礼拝得髓、第七仏教、第八心不可得、第九山水經、第十諸法実相、第十一王索仙陀婆、第十二仏經、第十三仏道、第十四自証三昧、第十五三昧王三昧、第十六大修行、第十七春秋、第十八転法輪、第十九三十七品菩提分法

と列次されている。これを辨注最後の十八卷に対すると、少しく異なっているが、面授・嗣書、心不可得の三卷を除いて対照すれば、大体に於て一致している。僅かに王三昧、大修行、春秋、転法輪の四卷に於て、やや列次の相異を見るのみである。天桂和尚の正法眼蔵は六十卷本を証本とすると言うのであるから、六十卷本と一致しそうなものであるが、義雲本では第十が大悟、第五十八が出家功德であるのに、大悟のところえ密語を出し、出家功德のところえ出家を挟んでいるあたり、むしろ七十九卷本に準拠していると言う方が、編次について言う限り当っているようである。ここで自分の研究未完成を白状しておく必要がある。七十九卷本は私の生涯に於て三種拝見し、一部は吾が書庫に貯えているが、七十九卷本が何れの時代から宗門に現れたものか解らない。もしこれが天桂和尚の正法眼蔵辨註系統で、其の本文を謄写したものであると言うことであれば、天桂和尚が七十九卷本の影響

を受けたのではないかと言う臆測は直ちに崩壊してしまうのである。辨注に於ける引用經典語録には、句読訓点があるが、七十九卷本の漢文調の本文は全くの白文である。辨注の本文を謄写したとすれば、返点や送り仮名を何故に省いたか、心不可得を何故に入れなかったかと言う疑問が起ってくるのである。これは後人の参究によりて明瞭にされるであらう。

(未完)